2010年7月15日

オリーブ栽培者のための情報誌

九州オリーブ通信

創刊号

①ニュース　③レポート2　⑤インタビュー　⑦連載2
②レポート1　④特集　⑥連載1　⑧連載3

① ニュース

福岡県那珂川町に"安徳台KOAオリーブの里"開設

▲オープニングセレモニーを飾る植樹祭の様子など

九州オリーブ普及協会(KOA)は、今春、福岡市近郊に初の直営農園をオープン、"第1回KOAオリーブ祭り"を開催した。会場には九州地区の生産者や一般参加者200人強がつめかけ、植樹祭や講演会では苗木の育成方法など熱心な質問が飛び交った。KOA代表理事・古賀直樹は、「近い将来、この地に10,000本のオリーブを植樹したい」と意気込む

■４月２４日、ＫＯＡは福岡市に隣接する筑紫郡那珂川町に同協会で初となる直営農園"安徳台ＫＯＡオリーブの里"をオープン。オープニングセレモニーとして"第１回ＫＯＡオリーブ祭り"を開催した。

▲会場は200人以上の参加者で埋めつくされた

■当日は、前日に地元メディアのニュースに取り上げられた影響もあって、オリーブ栽培に関心を持つ九州地区の自治体や企業、一般参加者など200人以上が参加、会場は多くの人で埋め尽くされた。一般向けプログラムはオリーブの植樹祭やKOA育苗施設の見学、国内外オリーブオイルのテイスティングなど。

■イタリア・トスカーナ出身の農業技術指導者であるゴフレード・スリス氏による講演会では、参加者は熱心に説明に聞き入っていた。その後に生産者意見交換会を開催、苗の育成方法や農園管理など技術的な質疑応答が飛び交い、主催者と生産者、ゲスト間で活発な情報交換が行われた。

■同園の敷地面積は約20,000平方メートル、かつてのみかん農園の遊休地を利用したもので、現在９品種のオリーブの樹を約1,000本栽培している。最終的には農地を２倍以上に広げて、10,000本まで植樹する計画で、国産オリーブの生産、栽培に関する研究のほか、物産品販売や交流スペースの併設など、観光機能も充実させていく。

■オリーブはみかん栽培のノウハウとの共通点が多い。また、病虫害に強く除草の必要がないなど、生産者の労力が極端に少なくてすむのが特徴。日照時間と降水量がともに多い九州はアジア有数の栽培適地で、好条件の耕作放棄地が数多く点在しているため、今後高いポテンシャルが期待できる。

■「団塊の世代がリタイアをはじめ、今後、日本の社会高齢化はますます高進する。オリーブは彼らの生きがいの再発見と、高齢者層の労働力化を同時に実現できる可能性を秘めている。これからの長寿社会や先進国にとっての、優れたモデルケースを確立したい」と古賀は抱負を述べる。

(4月24日取材)

②レポート１　地域のオリーブ普及を担当する栽培普及員制度をスタート

ＫＯＡは九州各地域においてオリーブの普及を担当する栽培普及員制度をスタート、6月13日に福岡県那珂川町の直営農園で、普及員へのエントリーを希望する一般参加者向けに講習会を開いた。

ＫＯＡオリーブ栽培普及員は、オリーブ栽培に関する基本知識の習得者としてＫＯＡが認定したもの。各々の居住地域においてＫＯＡが扱うイタリア・トスカーナ産オリーブ苗木の販売窓口を担当し、普及員は苗木の販売手数料収入や会報(本紙)の無料購読、ＫＯＡ主催のセミナーへの優先的参加、オリーブ栽培講習の無料受講などの特典が得られる。オリーブ栽培の盛んなヨーロッパでは類似のシステムが存在しており、実の収穫権を農地オーナーとオリーブ販売で利益を得たい希望者の間で広く仲介されている。

▲KOA安徳台オリーブ栽培場での実習風景

講習会には福岡県内で栽培普及員へのエントリーを希望する約３０人が参加、午前中にＫＯＡの苗木栽培施設やオリーブ農園で施設見学、栽培方法・管理方法などの実技を実施、午後からは主に関連知識の教育が行われた。

ＫＯＡでは栽培普及員の登録者数を年内に100人、数年以内に1,000人を目指している。並行して普及員をバックアップするサポートセンターの構築を進めており、対応マニュアルや各種支援ツール、成功事例などのナレッジ(情報共有)を進め、組織をあげてオリーブ栽培者希望者をバックアップしていく方針。

ＫＯＡ代表理事の古賀直樹は「この制度はオリーブ栽培を始めたい人を対象に、良質の苗木を仲介するもの。単なる販売だけではなく、木を育てていく過程においても、インターネットなどから必要な情報を取得できるシステムづくりを計画している」と説明する。

ＫＯＡでは今後も九州各地で定期的な講習会開催を計画、第2回は7月10日（土）久留米にて開催。
(6月13日取材)

③レポート２　”安徳台ＫＯＡオリーブの里”からの育成レポート

「イタリア産の苗は、生命力そのもの強さが全く違う。頭では分かっていたつもりだったが、実際に育ててみるとその差は歴然としている」と安徳台ＫＯＡオリーブの里・山本康弘管理責任者は胸を張る。

同園はＫＯＡが手がけるオリーブを育苗する生産・供給基地で、現在約２５,０００本の小豆島産オリーブ苗木と、１,０００本のイタリア産の苗木を栽培している。冒頭のコメントはこれら両者の育成状況に関して述べたものだ。

▲イタリア・トスカーナ産の力強い葉を持つ苗木(左)

世界のオリーブ市場には無数の品種が流通しており、かつ挿し穂や接ぎ木などの手法で量産されているため、実の品質や生産力は一様ではない。今回、ＫＯＡが輸入を始めたのはイタリア・トスカーナ産の、イタリア政府バイオ関連の研究機関によるスイショウの苗だ。国産・イタリア産の同時栽培をスタートしたのが約2カ月前、後者は成長スピードが早く枯死率が極端に低いという。

「工場でいえば苗を植えるのは設備投資、収穫は製品を市場に送り出すこと。生産者にとって、トスカーナの苗は投資回収率が高いことを意味する」

また、オリーブは害虫に強く痩せた土地でも成長するため、一般的には栽培に手間がかからないが、高い収穫率を維持するための栽培方法には研究の余地が残されているという。

「そもそも国内における大々的な栽培は、小豆島以外に例がない。日本の気候や土壌特性を考慮した育成方法、（自家受粉しない木であるため）どの品種の組み合わせがベストなのかなど、提携先の研究機関の協力も得ながら多方面から検証データを収集中だ。生産者の環境は様々であるため、個々にとって最適な栽培方法をコンサルティングできるレベルにまでもっていく」と意気込む。

約20,000平方メートルの農園エリアには５年もののオリーブの樹が２０本植樹されており数年後をめどに10,000本まで増やす計画。「観光農園化とともに、ここに来ればオリーブの全てが理解できる、生産者のモデルルームをつくりたい」

新しい形態のアグリビジネスを目指し、今後も挑戦は続く。
(6月2日取材)

④ 特集　KOAと”九州オリーブ100万本プロジェクト”の概要

KOAは「九州を東洋一のオリーブの島に！」の合言葉を実現すべく、2009年12月に設立しました。今回はその活動の中核となる”九州オリーブ100万本プロジェクト”の概要や具体的な事業内容、そして今後のマーケットへのアプローチ計画など、事業のアウトラインを紹介します

九州に100万本のオリーブの樹を

今回、ＫＯＡがオリーブ栽培に着目したのは、以下の３つの理由によります。

- 栽培作業が軽労働ですむこと
- 栽培適温の幅が広いこと
- 市場が有望であること

最初の2つの条件に関して、特に九州地区はアジア地区でも有数の好条件を備えたロケーションであるといえます。具体的にはオリーブ栽培の適地条件は（九州の主要農産物である）みかん栽培のそれと酷似しており、かつ両者を比較するとオリーブ栽培は約 1/5 の労働力ですむため、高齢化に悩む既存生産者からのシフト、新規参入の障壁が比較的低いと考えられるためです。

加えてオリーブ自体、消費量が多い割に自給率が低く（年間消費量30,000tに対して自給量は15t)、特に国産オリーブオイルは国内では比較的高額での取引実実績があります。よって、今後、仮に競合者が増えたとしても、比較的中長期にわたって有望視できるマーケットであるといえるでしょう。

KOAの目標は、今後10年間で九州地区に100万本のオリーブの植樹を実現することです。下の図は今年３月末現在の数字ですが、すでに合計42,450本のオリーブが植樹されています(KOAを含めた九州各地での栽培数）。地域再生の起爆剤としてオリーブ栽培は注目を集めており、今後、実績が伴えばこれらの普及スピードは、逐年、加速していくものと見込んでいます。

▲九州地区におけるオリーブ栽培計画の分布と栽培計画本数／2010年7月15日現在

オリーブ栽培をトータルサポート

とはいえ、国内で実績の乏しい果実を、生産者単独で栽培するのは非現実的です。そこで、KOAでは各分野の専門スタッフにより、以下のようなトータルサポートを手がけています。

- 遊休地の活用
- 高齢者のための働き場所の提供
- 長期的視野での地域再生事業
- 生産者間のネットワークづくり
- オリーブ栽培の技術者養成と指導
- オリーブ製品の評価
- オリーブ苗・樹に関する国内外情報の提供
- オリーブの商品化や販路拡大等のアドバイス

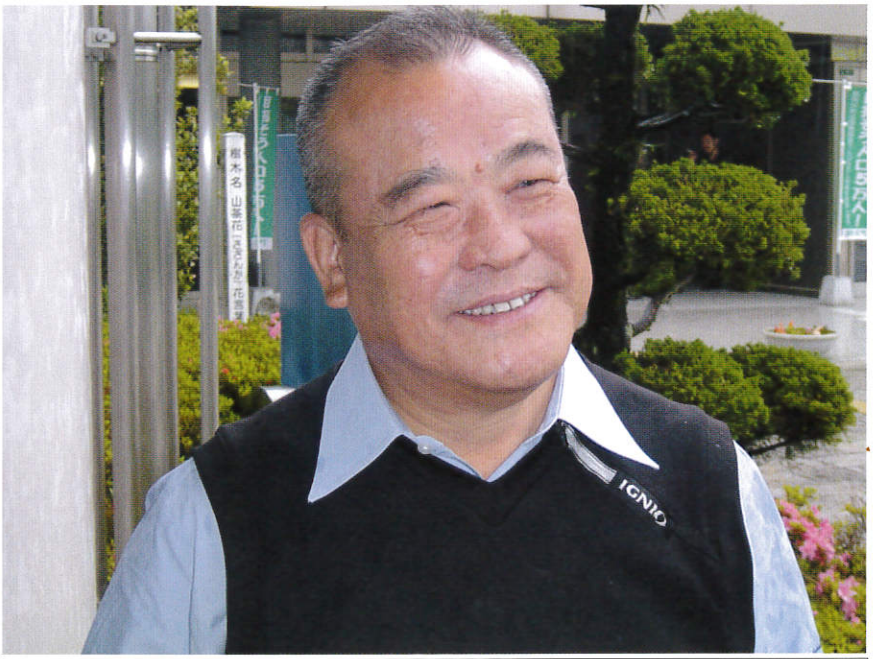
ポイントは２点あります。１点目は昨今、わが国は団塊の世代が社会の第一線からリタイアを始め、社会高齢化が高進している最中にあるため、この層が参入しやすい環境を整えること。もうひとつは、従来、日本の生産者が不得意としてきたマーケティングや流通面で十分なサポートを提供し、継続的に利益を生めるシステムを構築していくことです。これは国内では全く新しいアグリビジネスの形態であり、遊休地と高齢者の再活用により、地方経済の活性化を促します。

現在、ＫＯＡではこのプロジェクトに関して、「オリーブの社会普及活動」や「オリーブの栽培農家育成」などの実施をはじめとする事業を展開するにあたり、パートナーとなる協賛事業者を定期的に募集しています。対象は九州各地の地域自治体や地場企業、観光協会・農林業等の各種団体、主婦・高齢者などの市民活動グループ、ツーリズム・食関連のNPOなどです。

ＫＯＡは これらパートナーと生産者、地域自治体のハブとしての役割を担い、地域で恒久的に利益を生み出すシステムの確立を目指します。

⑤インタビュー

オリーブ普及は地域振興の起爆剤
-“九州オリーブ100万本プロジェクト”が始動-



百富孝行(ひゃくとみ・たかゆき)
九州オリーブ普及協会(KOA)理事プロフィル
台湾出身、1941年9月25日生まれの68歳。趣味はゴルフ。自称、仕事好き人間で、モットーは「仕事とは人ができないことを実現すること」

九州に100万本のオリーブの樹を―。壮大な構想をかかげて５年間、KOA理事・百富孝行は今年を「オリーブ元年」と評する。今、この九州においてなぜオリーブなのか？大型プロジェクトに着手した狙いについて、インタビューした

― 今、なぜ九州地区でオリーブ栽培に取り組むのか？

百富 理由は大きく3つある。一つは遊休地や耕作放棄地の再活用。2点目は農業従事者の高齢化に伴う軽労働環境の提供。最後に地球温暖化時代に対応した次世代農業の確立だ。

昨今の日本は食糧難の時代ではないが、新規農業従事者の減少や高齢化による離農者の増加により、国内自給率の低下が危惧されている。九州では狭い面積のなかで、中山間地や限界集落など未利用地が多く点在している。それらを有効利用することにより地域を活性化させ、ひいては豊かな「田舎暮らし」が実現できると考えている。

― 軽労働環境を提供することで農業従事者の減少に歯止めがかかり、ひいては遊休地も減少すると。

百富 今後１５年で九州の年間平均気温は１℃上昇するといわれている。結果、九州産の果樹であるみかん、梨、柿、ぶどうなどの生産適地が北方へ移動してしまい、生産が困難になる。

現在、博多湾で熱帯地方の魚が泳ぎ鹿児島や宮崎県の陸ではマンゴーが生産され、将来はバナナ、ドリアンなどが栽培される時代がくるだろう。こうした九州の環境で次世代の農作物のひとつとしてオリーブは有望だと思う。

― 具体的には。

百富 オリーブ栽培は、①遊休地を使用するため土地使用料をコストに入れないで済む、②初期投資が比較的少額、③軽作業で数百年継続できる、④気温は－10℃～＋40℃まで適応する、⑤沖縄を除く九州地方のほとんどの地区で栽培が可能、などの利点がある。

労力はみかん栽培の5分の1

― 九州では、みかん農家がオリーブ栽培を始めた例もあるようだが。

百富 みかん栽培地は概ね問題ない。育樹に必要なノウハウも非常に似通っている。栽培地もそのまま使用できる。

― オリーブ栽培のメリットとして軽労働をあげたが、みかん栽培と比べるとどの程度手間がかからないのか。

百富 小豆島でみかんとオリーブを両方栽培している方々の意見では、オリーブはみかんの5分の1程度の労力で済むとのこと。オリーブは比較的病虫害にも強く、集中的に手がかかるのは定植、収穫、選定の時期に限られる。

― “九州オリーブ100万本プロジェクト”はいつから取り組み始めたのか。

百富 ５年ほど前からだ。かれこれ農産物の流通には３０年関わっているが国内では改革が必要だと考えていた。要は流通過程において無駄が多く、生産者の収入を圧迫、小売価格の２０～３０％しか収入を得ていない。この無駄を省き、生産者の収入増により労働意欲を喚起し、国内農業の再生を図りたい。

―どのような方策を考えているのか。

百富 農産物は生産者から農協、青果市場、仲買人、卸問屋、小売店へと流れ、その都度手数料が徴収される。必要経費は別として、流通過程を簡素化して中間マージンを最小限に抑え、その余剰金を生産者に還元すべきだ。

—とはいえ、生産者だけで企業経営者のような改革を実行するのは困難だ。

百富　それが生産者側の課題だ。農産物はつくれるか、運べるかまたは加工できるか、売れるか、の３方面からビジネスプランを練る必要がある。今までの生産者は、得てして最初の項目だけに重点を置いていたように思える。

話をオリーブに戻すと、つくる点はＫＯＡが良質の苗を供給して育て方を指導する。加工面は各地に搾油設備を持つのは無駄が多いので、ＫＯＡが九州に3箇所ほど搾油設備を完備する。生産者が必要な時だけ利用し、使用料を払えばよい。販売は自分でさばける数量だけ生産者が取得し、残りはＫＯＡが全量引き受け、安心安全な国産「九州オリーブ」のブランドで市場に出す。

実現できれば九州全体でワンストップの流通システムが完結する。オリーブは一度システムを構築すれば数百年にわたって継続できる。早期普及のため、自治体にも支援をお願いしたい。

巨大なオリーブ市場

—　一方で供給過剰の心配は？

百富　国内産オリーブオイルの供給基地である小豆島の昨年の生産量はわずか15t、日本の年間消費量は2007年度実績で30,000t。自給率は0.05％に過ぎず、他は全て輸入品だ。小豆島の成木オリーブ樹は５～６万本と聞いているが、九州では100万本のオリーブを植えたい。それでも年間のオリーブ油生産量は1,500トン程度で自給率は５％以下、年々増加する消費量に供給が追いつかない状態が続くだろう。

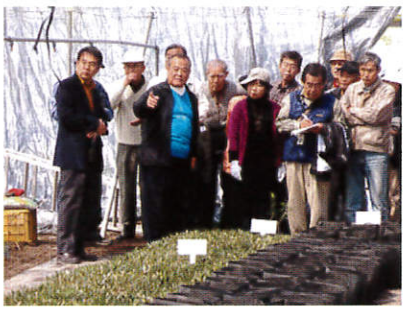
しかし一方で、格安輸入品との競合もおきるだろう。よって効率的な生産加工、販売システムの構築が急務だ。ロスを排除し、安心、安全、安定供給を図る。消費者に健康食品であるオリーブ油、各種のオリーブ商品を適性価格で提供したい。九州のオリーブ生産者が一致団結すれば十分可能だ。

—また、オリーブは化粧品や飼料としての付加価値が注目されている。

百富　オリーブは重量の約10％が油、40％が果汁、50％が搾りかすで、果汁と搾りかすは肥料あるいは廃棄物となっている。近年、搾りかすを養殖魚や畜産飼料の再利用研究が進んでいるが、ＫＯＡでは九州大学農学部と共同でこの分野の研究に取組んでいる。

—まだまだ商品化の可能性があると。

百富　視点を変えれば、それは生産コストを下げる要因にもなる。現在、オリーブオイルの国内外価格差は３～５倍あるが、これを少しでも縮めることができれば、消費者は国産オリーブ油を求めやすくなる。



▲生産者に苗の育成状況について説明する(左から３人目)

生産性の高い苗を植える

—　100万本はいつ達成できそうか。

百富 10年計画だ。漸く成果が見え始め、ＫＯＡを設立して体制を整えた。今年はオリーブ元年だと思っている。ただ、そのためには九州各地の自治体の協力がほしい。自治体が協賛し補助金などの援助により、オリーブ事業が盛んになる。地域が活性化すれば、恒久的な地域おこしに繋がると思っている。

もうひとつ、小豆島のオリーブ樹は1907年にアメリカより輸入され１００年が経過した。オリーブ油の国民消費量の違いもあるが、その間オリーブ樹の効率的育樹、新種開発、性能について地中海沿岸諸国のオリーブ産国に比べ日本は研究が遅れている。

現在小豆島のオリーブ樹１本より収穫できるオリーブ果実は、１５kg程度であるが、地中海沿岸諸国では２５kg程度だ。オリーブ油の含有量も日本では１０％程度であるのに対し地中海諸国では品種にもよるが１５％程度。その結果、オリーブ油の収量は2.5倍にもなる。地中海沿岸と日本では気候が異なり、直ちに上記の結果が表れるとは限らないが、KOAでは3,000本のイタリア産オリーブ苗を空輸して実験中だ。

—　そんなに差があるのか？

百富　イタリアではオリーブ栽培の歴史が長いし、その間、官民あげて樹の品種改良に取り組んできた。”桃栗３年柿８年”という。加えて私の造語だが”長寿のオリーブ１５年”。つまり今からオリーブ樹の研究を初めても直ぐには成果が出ない。オリーブ栽培で日本はイタリアにとても適わないが、彼らのノウハウを利用することはできる。

今回、 KOAでは在日イタリア商工会議所福岡事務所の協力を得て、イタリア政府が指導し、関係の大学や農園が開発した苗木を扱う。技術指導のパイプもできた。オリーブは結実後の修正が利かないので最初に品質のよい苗を正しいやり方で植樹、育樹する。確実に実がなり、国内で最も高い生産性が期待できる。

—　4月24日の”安徳台KOAオリーブの里”開園式では、生産者との会合における挨拶で涙する場面があったが。

百富　いや、お恥ずかしい(笑)。声をかけた生産者団体が九州中からほぼ全員集まってくれた。この5年間、手探り状態でずっと各地を走り回ってきたが、沢山の方々の顔を目の前にすると、私自身、夢が着々と現実になる感触を得た。

このプロジェクトは私にとって生涯最後の大仕事になるだろう。九州のオリーブ生産団体の方々の手足となりたい。各地で始まっているオリーブ栽培事業が成功し、後世に語り継がれ、子々孫々に喜ばれることを願っている。

(5月17日取材)

⑥ 連載1　オーナー探訪-Vol.1 / 長与オリーブ園・進藤昭子さん(69歳)

▲「オリーブ園にいるときが一番幸せ」と微笑むオーナーの進藤昭子さん

長崎市の北東約10km、大村湾南岸をのぞむ風光明媚な斜面に位置する”長与オリーブ園”。5年前に植樹、現在、約300本のオリーブが実をつけている。料亭の女将から転身、独学で農園開設したという進藤さんを訪ねた

「毎朝、農園に到着したら、必ずオリーブの樹に『おはよう』って声をかけて回ります。わが子のように可愛くてねぇ」と長与オリーブ園のオーナー・進藤昭子さんは目を細める。

トレードマークの赤い帽子とエネルギー溢れる笑顔は、まるで都会のファッションショップの店員のようだ。同園は城壁跡の石垣を利用した段々畑状の敷地で、昨年から実をつけ始めた約300本のオリーブの樹が配置されている。大村湾の美しい入り江が一望できるロケーションで、進藤さんは「ストレスという言葉が存在しない楽園のような場所」と表現する。

しかし、ここに至るまでの道程は決して平坦ではなかった。料亭の女将だった進藤さんは、家族の健康上の理由で店舗の経営継続が難しくなり、５年前に独学でオリーブ栽培を始めた。長与町はみかんの産地。ところが近年では農業従事者の高齢化や市場の縮小、地球温暖化などの影響で経営の苦しい農家が増加、進藤さんはこうした環境変化にうまく対応できる方法はないかと熟慮の末、オリーブの樹に出会ったという。

▲眼前に大村湾をのぞむ長与オリーブ園

「当時、無謀な素人だと思われたでしょうね。農業未経験者だったからこそこのような発想ができたのだと思います」と振り返る。

長与町でオイルを絞るのが夢

オリーブ園の開設を決めた後も、進藤さんは労を厭わず独学に励んだ。小豆島を訪問すること8回、現地の自治体や小豆島産オリーブの約半分の加工を手がける東洋オリーブの関係者などと精力的に面会し、情報収集した。

「全ての季節と、収穫などイベントがある度に足を運びました。百聞は一見にしかず、本気で挑戦するのであれば実際に自分の目で確かめないと駄目だと思います」

また、進藤さんは地元農業の振興にも熱心に取り組み、昨年夏、長与オリーブ園の開設に尽力した福田傳さんらとともに”長与町オリーブ振興協議会”を立ち上げた。生産・流通技術を中心とした情報交換を行い、現在、同会には約35の農家が加盟、各々で100本程度のオリーブを植樹しているという。進藤さんは「オリーブ園は福田さんや葉山友昭町長のバックアップのお陰で開設できたもの。 今度は私の経験を生かして、少しでも地元の発展のために役に立ちたい」と胸の内を明かす。

進藤さんの今後の夢は、長与町でオイルを絞ることだという。「現在、私の農園でとれた実は小豆島に出荷していますが、地元でこうした光景が見られるようになるといいですね。まともな絞り機を購入すると1,000万円くらいの費用がかかるので、町にも協力をお願いしています」

園内の樹々には、沢山の蕾が見られた。あと１週間ほどで、白い花が開くという。昨年は約２００kgの実を初収穫、今年はさらに多くを期待できそうだ。「ここにいるときが一番幸せです。趣味と実益を兼ねた生活って、本当に素敵ですね」

取材中もこの農園の訪問者が後を絶たない。ハッピーライフを満喫する進藤さんの笑顔が、きっと多くの人をこの場所に引き寄せているのだろう。
(5月15日取材)。

プロフィル
- 長与オリーブ園
- 長崎県西彼杵郡長与町岡郷1972
- TEL: 095-883-5418
- 食用オリーブや化粧品、苗木の販売、など

⑦ 連載２

オリーブの育て方-Vol.1 / 苗の選定と植樹について

本コーナーではオリーブ栽培を初めて手がけられる方々に、数回にわたってそのノウハウを紹介します。第１回目は適切な苗選びです

苗選びのポイントとは？

ビジネスとしてオリーブを栽培する場合、最も重要なポイントとなるのは苗選びです。いったん苗を植えてしまうと、オリーブは数百年継続して成長していきますので、基本的に途中で手を加えるのは困難であるためです。よって栽培者が望む結果を得られる苗かどうかをよく吟味して、品質のよい苗を選ぶ必要があります。

最大の狙いは確実に多くの果実を収穫することです。観賞用として園芸店で手軽に入手できるものには、果実の収穫が困難なものもありますので注意が必要です。苗選びの際には、以下の2点を基準に検討してください。

① 利用方法として、油用、食用、共用のいずれかを決める

② より多くの果実が確実に収穫可能な苗(油用の場合はより多くのオリーブ油が抽出できるもの)を選択する

オリーブの品種と収穫効率

世界では約1,000種類、日本では約40種類のオリーブ樹が栽培されていますが、一般的に流通しているのは別表の4種類です。その中で最も品質面で優れたオリーブ樹はイタリア・トスカーナ地方原産樹といわれています。われわれの調査研究の結果、九州地方で栽培に適したイタリア．トスカーナ原産種は数十種類あります。そのなかから別表の6種類を選び比較しました。

１本の樹より収穫できる果実は、日本産で平均15kg、イタリア産平均25kg。なお、オリーブ油の抽出量は日本産平均10％、イタリア産平均15％です。つまり、油量についていえば日本産1.5kgに対し、イタリア産は3.75kgになり、生産効率で約2.5倍の差がつく計算になります。

ただし、イタリア産のデータは、イタリア国内でのものであり、日本での栽培において同一結果が得られるかは未知数です。KOAでは本年4月に3週間にわたり、イタリア．トスカーナより技術者を招き、九州各地を調査しました。その結果、気候風土の違いはあるが、イタリアと九州では、ほぼ同一の収穫が期待できるとのことでした。

▲うまく育つと毎春に沢山の蕾をつける

現在KOAでは、3,000本の苗をトスカーナより空輸し、熊本県荒尾市に1800本、大分県別府市に100本、福岡県那珂川町のKOA直営農園に1,100本試験栽培を行っています。テスト結果が出るのは、3～4年先ですが現在のところ順調に生育していますので、計画通りの数字が得られると期待しています。

日本産はすべて「挿し穂」で増産していますが、今回のイタリア・トスカーナ産はすべて「接ぎ木」です。

「接ぎ木」は多くの手間がかかり「挿し穂」より若干高価ですが、その分確実に成育し、結実します。今後の九州のオリーブは、イタリア・トスカーナ産が主力になるでしょう。

日本産

品種名	用途	油含有率	特性
ミッション	食用・油用	15～19%	晩成種、スマートな樹形
ルッカ	油用	25%	樹勢旺盛、樹姿開帳型
ネバディロブランコ	油用	17%	早生種、花粉が多い
マンザニロ	食用	9～14%	スペイン語の「小さなリンゴ」が由来

イタリア産

品種名	用途	油含有率	特性
フラントイオ	油用	22～24%	病気に強く、地域対応性も高い。香りが高い
ペンドリーノ	油用	22～23%	オイルは果実の風味含み美味。花粉が多い
タッジャスカ	食用・油用	23～26%	オイルはマイルドな味わい。潮風に強い
レッチーノ	食用・油用	25～27%	オイルは果実の風味含み美味。
マウリーノ	油用	20～21%	オイルはくせのない味わい。花粉が多い
コラティーナ	食用・油用	24～25%	ポリフェノール含有量が高い。苦み辛み有

⑧ 連載３

トスカーナ通信-Vol.1 / オリーブとイタリア人

オリーブ苗木の提供や技術指導などを手がけるKOAの主要パートナー・在日イタリア商工会議所福岡事務所。ドリアーノ・スリス所長が、本場イタリアにおけるオリーブにまつわる情報を連載で紹介します

オリーブは最高の生活必需品

「鳩は夕方にノアのもとへと帰ってきた。見よ、鳩は嘴にオリーブの葉をくわえている。ノアは地上から水がひいたことを知った」これは創世記の一節ですが、ヨーロッパにおけるオリーブは、旧約聖書の時代からずっと平和のシンボルとされてきました。毎日の生活のなかでも、イタリア人にとってのオリーブは最も不可欠な存在となっています。

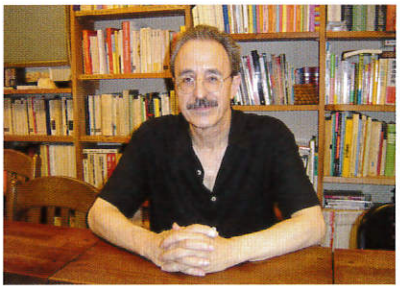
油という言葉を聞くと、ほとんどの日本人は火を通すもの、摂取を控えた方がよいもの、などといった比較的ネガティブな印象を受けると思います。ここがイタリア人の認識と根本的に違う。われわれにとってのオイルはオリーブと同義で、それは生で食するもの、ジューシーな風味、健康維持に欠かせない存在です。

イタリアは成人病が少ない国

実際にイタリアは世界で最も循環器系の病気が少なく、心臓病や脳梗塞などの成人病の発生率も低いのが特徴です。オリーブオイルは基本的に果実のジュースですので、決して肥満の元凶にはなり得ません。私達はほぼ毎食オリーブを使い、サラダの皿底に残った油などもみんな飲んでしまいます(笑)。生後間もない赤ん坊にも、人体に優しいという理由で、皆、オリーブオイルを与えながら育てます。

毎年４月か５月、日・月曜日の２日間にかけて催される復活祭では、われわれは皆、協会で聖なるオリーブの枝を買ってきて、各々の自宅をデコレートします。なかには金や銀に装飾されているものもあって、ヨーロッパのお祭りらしく部屋のなかが本当に美しくなります。

日本に住み始めて35年、昔からこの素晴らしい植物を普及していくのが大きな夢でした。オリーブの樹は気候適性の幅が広く、特に九州は日照量が豊富なので、きっとうまく育つはずです。



▲ドリアーノ・スリス在日イタリア商工会議所福岡事務所長

編　集　後　記

日本のモノづくり精神を地域再生に

昨今の日本は元気がない。”東洋の奇跡”と評された高度経済成長を経験し、一時は儲かりすぎて深刻な貿易摩擦さえ生じたかつての景気のよさはどこへ消えてしまったのか。トヨタ自動車のリコール問題などを眺めていると、ついにその屋台骨までもが危うくなり始めた不安を感じずにはいられない。

歴史的に日本人はモノづくりが得意であった。島国ゆえ繊細な文化や生真面目な国民性が育まれ、質の高い商品を海外へ輸出してきた。近年の国際化の進展やIT革命に沸く周囲の情勢に対して安易に先を急いだのが裏目に出たのではないだろうか。今一度、わが国は自らの競争力の源泉に目を向けるべきだ。

オリーブ栽培は欧州が本場だが、今後私達は国内に適した方法論の確立に取り組むべきだ。食の安全に関する危機意識は大きなチャンスだ。世界中から注目された生産ノウハウに今一度目を向け、農業再生を目指す絶好の機会は、今をおいてほかにない。

九州はアジアにも近く、大きな可能性を持った地域だ。われわれＫＯＡの挑戦が、単なる一果実の生産ビジネスにとどまらず、特に地域再生のよきモデルケースとなることを願いたい。

(H)

九州オリーブ通信　創刊号
発行者: 古賀直樹
発行所: 一般社団法人　九州オリーブ普及協会　編集部
〒830-0032 福岡県久留米市東町495-1
TEL: 0942-27-7413 FAX: 0942-31-1191
info@kyushu-olive.or.jp　http://www.kyushu-olive.or.jp/
平成22年7月15日発行
※ 本会報に関するお問い合わせ・お申し込みは上記までご連絡ください

年会費無料
オリヴェッタ倶楽部：発足記念
新規入会キャンペーン
期間限定：2010.6.15（火）～8.31（火）
オリーブライフを楽しむコミュニティ
オリヴェッタ倶楽部
Olivetta Club
http://olivetta-club.com/